
とある私立探偵の事件簿・ファイル1 ~ 百円ショップ殺人事件 ~

リート

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

とある私立探偵の事件簿・ファイル1 ～百円ショップ殺人事件～

【Nコード】

N7998B

【作者名】

リート

【あらすじ】

とある私立探偵のもとにやってきた兄弟。彼らは頼む。父親を殺した犯人を探し出してほしい、と。捜査は事件が発生して十五年が過ぎ、時効で打ち切られたが……

パート1 請ける(前書き)

これ、推理物を装ってはいませんが、いわゆる証拠を元にさっそうと犯人を追い詰めるタイプのものではありませんので、あしからずお読みください。

パート1 請ける

今回持ち込まれた依頼は、少々特殊なものだった。
父親が殺された。だが十五年の歳月が過ぎて時効になり、警察が
捜査を打ち切った。

それでも犯人が知りたい。

「……以上が、私達が覚えている全部です」

依頼人はその娘、田中花子（プライバシー保護のため仮名）さん
二十五歳と、その弟、田中太郎（こちらもプライバシー保護のため
仮名）さん二十二歳。

「それと、こつちがぼく達で集める事のできた資料です」

「拝見します」

私は太郎（仮名）君が机の上に置いた資料を手を取った。

そこには当時の現場写真がいくつかと、そして父親の知り合いの
リスト、など。

「あの、お願いできますか？」

太郎（仮名）君の方が、おずおずと尋ねてくる。

「ええ。見つかるかどうかは分かりませんが、全力を尽くしてみま
す」

私はひとまず資料を机の上に置き、営業スマイル。

「よろしく願います」

二人は頭を下げ、そして事務所を後にした。

*

残された私は、二人が残していった資料に目を通す。

依頼人の父親、田中健一（仮名）さんが殺害されたのは自宅。部屋中が荒らされており、犯人は強盗の類と思われる。

凶器は真新しい包丁。だが、その包丁は百円均一ショップなどで手に入るようなもので、購入先は不明。

犯行時刻は深夜で、なおかつ家族はちょうど父親を残して実家に戻っていたため、目撃者は皆無。

しかも十五年前と言えば、セキュリティに関する認識もまだ甘く、田中（仮名）さんの家も、警備会社と契約していたわけでも他の何かの防犯対策をしていたわけでもなかった。

「おやつ、食うか？」

「ありがとう、ゲンさん」

そう言いながらお菓子を持ってきてくれたのは、この事務所の事務をしてきている山田ゲン（いちおう、こっちは仮名ね）さん。

「……難しいのか？」

「ええ。ちよつと……ね」

写真を見る。

警察から手に入れたのだろうか、後頭部からと背中から血を流して倒れている男性の周りの床に白いテープが張っており、五の数字か書かれた札が一緒に映っている。

別の写真には、犯人が着ていたものと思われる、血がべつとりと付着したレインコートと凶器の包丁。資料によれば、包丁には指紋が付いていなかったらしい。

つまり手袋をしていたのだろうか……それも今となっては探しようも無い。

「ん、俺には難しい事は分からんけどよ。なんか力になれることがあつたら何でも言ってくれ」

「了解です」

私はゲンさんにはほほ笑みを返して見送ってから、再び資料に目を通し始めた。

パート2 集める

事務所内に、モーター音が響く。

「あー……効くわ……」

あちこちで聞き込みをし、戻ってきたらもう夕方。

私は一日の疲れを癒すべく、愛用の電動マッサージ機に素足を乗せていた。

「お疲れさん。お茶、飲むか？」

「ありがとう……」

私はゲンさんからお茶を受け取り、一口すする。

お茶の香りがすつと鼻を抜けていき、こんがりそうになる頭が少しほぐれた気がする。

「さて、やりますか」

一息入れた私は、集めてきた資料の整理に取り掛かった。

*

資料その一 花子（仮名）さんと太郎（仮名）さんの証言

その日、花子（仮名）さんと太郎（仮名）さんとその母親は、旅行から帰ってきた。

父親は急に仕事が入ったので、一緒に旅行には行けなかったらしい。

鍵で家に入ろうとしたら、玄関の鍵が開いていた。

不審に思っただけに入ると、家が荒らされていて、太郎（仮名）さんが、居間で血まみれになって倒れていた父親を発見した。

母親が取り乱しながらも警察に電話。

しばらくしてすぐに警察がやってきた。

そして捜査が始まったが……結局、犯人は見つからずに、現在に

至る。

資料その二 母親の証言

内容は資料その一と同じ。

だが、彼女は二人の子ども達とは違い、もう諦めているようだった。

資料その三 関係者リスト（ここに書くのは全て仮名）

働いていた会社の上司、鈴木秀孝。

現在、同じ会社のやり手の営業部長。人望はあるようだ。昔、大
学でラグビーをやっていて、被害者の先輩でもあったらしい。

被害者とのトラブルは抱えていなかったようだ。
本人からもらったコメント。

『時効、か。あれからもう十五年なんだな……』

働いていた会社の部下その一、山口秀樹。

現在は転職し、輸入関係の会社の部長。最近、海外への長期出張
から戻ってきた。法律に詳しく、司法書士の資格を持っている。

同じく、被害者とのトラブルは無かったようだ。

本人からもらったコメント。

『……時効で捜査は打ち切り、か……。結局、警察は役に立たな
いな』

働いていた会社の部下その二……岩山和夫

現在、同じ会社の営業課長。営業成績は良いようだ。高校時代に
野球をやっていたらしく、甲子園まで行ったとか。

被害者とはソリが合わずに、よく対立していたらしい。だが、よく一緒に酒を飲みに行く仲でもあったらしい。

本人からもらえたコメント。

『時効になってしまったんですね。……犯人、絶対に見つけてください』

友人その一、春野敏行。

現在はラーメン屋の店主。そこそこ繁盛していて、ラーメンもおいしかった。被害者とは、高校時代の友人だったらしい。

被害者には店の開店資金を借りていたが、被害者の死亡後も遺族に残金を払い続け、二年前に完済したらしい。

本人からもらえたコメント。

『はつきり言って悔しい。……でも、奥さんや花子（仮名）ちゃん、太郎（仮名）君のほうがもっと悔しいだろうな』

友人その二……東山栄一

無職。と言うか、五十五歳にして職歴無し。被害者とは、小・中学校時代の友人だったらしい。高校へは進学しなかったが、交友関係はずっと続いていたようだ。

俗に言うパチプロ。だが、それほど稼いでいるわけでもない。被害者にはよく金を借りていたらしく、未返済額は相当のものらしい。本人には会えなかった。コメント無し。

資料その四 当時の部屋の様子

普通の一軒家。

家の中のほとんどが荒らされており、ありとあらゆる家具の引き出しが開けられ、中身が乱雑に放り出されていた。

押入れの中も同様に荒らされていて、全てが床に放り出されてい

た。

特に居間については足の踏み場も無かったようだ。

資料その五 関係者のアリバイ

母親と子ども二人は隣県の温泉街まで小旅行。

鈴木孝雄、山口秀樹、および岩山和夫は自宅で就寝。

春野敏行はまだ店でラーメンを作っていた。

東山栄一は居酒屋で仲間と酒を飲んでいた。

*

ふと、目を開く。

窓の外を見ると、ビルの間から太陽が顔をのぞかせている。どうやら、資料を整理している途中で寝てしまっていたらしい。

「あ……大変……！」

あわてて立ち上がり、はらりと肩にかかっていた毛布が床に落ちる。

毛布？

覚えが無い、などと思っていると、不意に事務所のドアが開く。

「起きたか？」

「買った物袋を提げたゲンさんが、入ってきた。」

「あ、うん。おはようございます」

「おう、おはようさん。……朝飯、買ってきたぞ。食うか？」

「はい」

袋の中から出てきたのは、サンドイッチにコーヒー牛乳。

私はそれを受け取り、まずはサンドイッチの包装紙を破る。

「仕事熱心はいいけどよ、夜更かしは美容の敵だぜ」

「ついで、その」

私はサンドイッチをかじりながらゲンさんを見て、ふと気付く。

「……ゲンさん、帰ってないんですか？」

おしゃれには気を配るゲンさんが、昨日と同じ服を着ている。

「うら若き乙女を一人残して変えるのもアレだろ？」

「……ごめんなさい」

私はサンドイッチをかじったまま、素直に頭を下げた。

*

資料その六 気になったこと

プロの手口とは考え辛い程、部屋が荒らされていた事。

そしてわざわざ百円均一ショップで包丁を購入した事。

この二つから考えると、おそらく、犯人は最初から被害者を殺すつもりだった。

そしてあの人のコメント。

だとしたら、犯人は……

パート2 集める（後書き）

物語の構成の基本は『起・承・転・結』だと言われています。

筆者は、推理小説にこれを当てはめると、『事件発生・資料集め・事件解決・エピソード』だと思っていました。

パート1は事件発生、そしてこのパート2はまさに資料集めでしたが、いかがでしたでしょうか？

推理モノとしては致命的な事に、犯人を指し示す物証などは出てきませんでした。あれこれ考えて見てくださいます。

パート3 解き明かす

時効のカウントは、海外に出ている間は進まない。
その事を私は、とある刑事ドラマを見て知った。

*

私はゲンさんを連れ、喫茶店で、呼び出したある人が来るのを待っていた。

その人が犯人だと、思ったから。

「お待たせしました」

そして背広姿のその人がやってきた。

私とゲンさんはゆっくりとお辞儀をする。

「……………」

彼は座り、持っていた鞆をひざの上に置く。そして注文と取りにやってきたウエイトレスさんにコーヒーを頼み。

そして一息吐いて。

「さっそくですが、お話を。……………昼休みに抜けてきたので」

「そう、ですね」

私は資料を机の上に置き、咳払いをした。

*

漫画や小説ならこんなとき、私立探偵はさまざまな証拠を持ち出して、さっそくと犯人を追い詰めるのだろう。

だが、私は確たる証拠を見つけることは出来なかった。

彼を犯人だと決め付ける証拠……………どこるか、疑う要素すらほぼ無いのだ。

「ただ、彼の言葉と職業、そして持っているはずの知識を考え併せれば……そうとしか考えられなかった。少なくとも、私には。」

*

私はボイスレコーダーの録音ボタンを押し、それを机の上に置く。「単刀直入にお尋ねします。十五年と一ヶ月前、あなたは人を殺しましたね？」

「何をいきなり」

彼は若干早くそう答え、そして表情を変えずにそう返してくる。

「……あれから十五年と一ヶ月の歳月が過ぎました。でも……花子さんも、太郎さんも、真実を求めています。彼らが前に進むには、真実を知らなくちゃいけないんです」

彼の表情に、少し影が差す。

「もう十分ですよ、山口秀樹さん。これ以上……彼らを苦しめないでください」

*

しばしの沈黙。

ウエトレスさんが、コーヒーを置いて、立ち去るのを見計らうかのように、彼……山口さんが口を開く。

「なぜ、私が犯人だと？」

「証拠は、当然見つかりませんでした。アリバイも不自然なところはありませんでしたしね」

「だったら、なぜ」

「でも、犯人は包丁を持ってきた。部屋の荒らし方もプロのそれとは違う。……つまり、犯人は泥棒なんかじゃないんです」

私は砂糖をコーヒーの中に入れ、スプーンでかき混ぜながら話を進める。「だが、それでは私を特定できない」

「そうです。……あなたの言葉が、ヒントでした。……あなたは、事件が時効だとは言いつきりませんでしたが。時効で捜査が打ち切られた、と言っただけで。」

あなたは知っていたんですね。まだ、本当は時効じゃないと言っ事を」

私はそう言って、山口さんの目を見据えた。

山口さんは満足げに頷き、コーヒーを飲む。

「今の会社に入っってから現在に至るこの五年間。私はその半分を、海外で費やしていた。だから、本当はまだ、時効ではない」

カチッと音を立てて、カップを置く山口さん。その顔には疲労の色が、濃く刻まれている。

「あの包丁は、本当は自宅で使う予定だった。当時一人暮らしを始めた私が、自炊をするために購入したものだ。」

家に帰った直後、田中さんから電話が入った。今家族が出払っているから家で酒でも飲まないか、と。

チャンスだと、思った。

私はあわてて服を着替え、鞆にカップと手袋と包丁を入れ、田中さんの家に向かった。

後は現場から推察される通りだ」

つまり。

手袋をはめ、カップを着た山口さんは、買ったばかりの包丁で田中さんを刺殺し、出来るだけ部屋を荒らして、財布と預金通帳とを奪って強盗に見せかける偽装工作をした後に田中さんの家を出た。

そして手袋とカップを人知れず処分した。

「……動機が、どうしても分からないんです」

「心は、他者には知りえない」

山口さんは吐き捨てるようにそう言っただかと思っくと、一気にコーヒーを飲み干した。

「お二人とも、飲まないで冷めてしまう」

「え、はい」

「……おう」

私とゲンさんは、促されるままにコーヒーを飲む。

コーヒーの風味と苦味、そして砂糖の甘さが口に広がり、乾いていた喉を通り過ぎる。

「金に困って上司の家に押し入った。花子さんと太郎君には、そう伝えて欲しい」

山口さんのひどくさびしげな瞳に……私達は、ただ頷くしかできなかった。

パート3 解き明かす（後書き）

筆者もテレビの刑事ドラマを見て知りました。

いろいろ検索したところ、実際にある法律のようですので、気になる方は検索サイトで『刑事訴訟法 時効 国外』などをキーワードにして検索してみてください。

法律はとにかく、解決編はいかがでしたでしょうか？

犯人の動機はあえて描いていないのですが、理由は考えるのがめんど……ではなく、安易に口に出せるような軽い気持ちで人は殺せないし、殺してはいけないと筆者は思っているからです。

少なくとも、ちょっととした喧嘩でそこまでやってしまうなんて、絶対におかしいですよ。

以上、後書きでした。ちなみに、次話で最後です。

パート4 歩き始める

山口さんの過去を徹底的に調べれば、おそらく、動機は推察できるだろう。

でも、私はそれをしなかった。

本人から聞く以外の方法で知ってはいけないような気がするから。職務怠慢と言われても仕方が無いのだけれど、土足で踏み込んではいけないと、私は思ってしまった。

*

「以上が、調査の結果です」

私は山口秀樹が犯人であった事と彼の語った言葉を、そして彼が自首した事を依頼人の二人に聞かせた。

「どうも、ありがとうございます」

「……ありがとうございます」

複雑な表情の二人は、それでも、前を向いて、事務所を後にした。

……これで、本当によかったのだろうか？

私が今回したことといえば、ただの推測で、一人の人の人生を奈落の底に叩き落したことだけ。

報告結果だって、二人の知りたかった事にまでは言及していない。

結局、私は……

*

「つぶはあ〜！」

私とゲンさんは空になった缶を机に叩きつける。

「まだ飲むか？」

「お願いします」

私は事務所備え付けの台所へ向かうゲンさんの背中を見ながら、心の中でそつと感謝の言葉を呟く。

いつも、ありがとう。

ゲンさんの気遣いが、いつもながらに心に染み入るようで。

「あ、おつまみも食べたいです」

「おう、任せとけ！」

その日、私はのしかかるやりきれない気持ちを吹き飛ばすかのよう
うに、浴びるようにビールを飲みまくり……

めでたく、次の日に二日酔いで倒れました。

とある私立探偵の事件簿・ファイル1 ～百円ショップ殺人事件～
完

パート4 歩き始める（後書き）

以上、最終話でした。最後までお付き合いいただきありがとうございます。

感動でもなく、すつきりもしない終わり方になってしまいました。オチ自体はサスペンス風に仕上げてみたのですが……いかがでしたでしょうか？

ご感想等、心よりお待ちしております。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7998b/>

とある私立探偵の事件簿・ファイル1 ~ 百円ショップ殺人事件 ~

2009年7月3日19時04分発行